

抄 録

第37回 長野県乳腺疾患懇話会

日 時: 平成25年11月30日 (土)

場 所: 信州大学旭総合研究棟 9 階講義室

当 番: 増田 裕行 (増田医院)

一般演題

1 長野県における乳がん検診の実施状況について

長野県健康福祉部健康長寿課

○小林 良清

長野県の乳がん死亡者は平成24年, 216人で, 前年比9人増であった。

長野県における乳がん検診の受診率は, 調査により異なるが, 平成22年の国民生活基礎調査では25.9%であり, 全国の値を上回る。一方, 地域保健・健康増進事業報告では, 平成23年は4.4%と, 全国の値を大きく下回り, 順位は46位である。これはマンモグラフィと視触診の併用検診のみが対象となるが, 長野県では視触診を実施しないことが多いためである。

県では, がん検診の推進のため, がん予防研修会や企業との連携, イベントの実施等の普及啓発を行っている。また, 市町村がん検診のプロセス指標の分析や事業評価により, がん検診の精度向上に取り組んでいる。

平成25年10月には長野県がん対策推進条例が施行された。条例では, がんの早期発見及び早期治療について県・市町村・県民・関係者等が連携し, 推進することが謳われている。

2 長野県健康づくり事業団における乳房検診の現状と報告—MMG 編—

公益財団法人長野県健康づくり事業団

○古清水里江, 竹内 映, 井上 直美

小林 喜子, 中村 千恵, 松本るりこ

柳元 裕子, 村山真由美, 善哉のぶ子

増田医院

増田 裕行

【はじめに】当事業団は集団 MMG 検診を平成11年度にモデル事業を開始, 平成14年度から事業化。14年

間の成績を乳がん追跡調査のデータを基に報告し, 今後の課題も提示, より良い乳がん検診を目指すための検討とする。【まとめ】乳がん発見数は増加傾向にあり, 50~60歳代が多い。0期とI期で7割以上を占める。14年間の累計は検診総数190,507人, 要精検者数16,504人, 要精検率8.7%, 精検受診率94.9%, 乳がん数561人, がん発見率0.29%, 陽性反応的中度3.81%。「乳がん検診に関する精度管理指標」, 要精検率11.0%以下, がん発見率0.23%以上, 陽性反応的中度2.5%以上の指標を満たしている。【課題】受診者数は減少傾向が続いている。コール・リコールなどの積極的な受診勧奨や新たな取り組みが必要。当事業団ではDMMG検診車を増車予定。安定した精度管理を行い, デジタル化を進めたい。

3 当院における乳腺超音波検診の取り組み
長野赤十字病院検査部

○古畑 香, 二茅 愛子, 石坂あづさ

鈴木 杏子, 外谷たか子, 酒井 幸子

宮本 民子

同 病理部

西沢 政則, 渡辺 正秀

同 乳腺・内分泌外科

福島 優子, 浜 善久

【はじめに】当院では2012年7月より, 健診センターの乳癌検診のオプション検査として乳腺超音波検査(US)を開始した。今回, これまでの取り組みを報告する。

【対象・方法】2012年7月~2013年9月のUS検診受診者214名を対象とし, 要精査率, 当院精査受診率, 癌発見率を調査した。

【結果】要精査率25.7%, 当院精査受診率43.6%, 癌発見率0.46% (N=1) であった。検診発見の乳癌1症例は, カテゴリー3で要精査となり, 当院乳腺外

科を受診。穿刺吸引細胞診はClass V, papillotubular carcinoma と診断された。

【まとめ】受診者214名中、20代2名、30代80名、40代50名、50代53名、60代18名、70代11名と30代の受診が多くみられた。若年者において乳癌検診意識は向上していると推測された。しかし、精査受診は50%未満であり、精査受診を促すよう受診干渉も必要であると考えた。今回の乳癌1例がUSでカテゴリ-3と判定されたことについて、背景に乳腺症があり良悪の鑑別が困難であった可能性が示唆された。

4 技師による乳房超音波検査カテゴリー分類導入後の検討

社会医療法人財団慈泉会相澤健康センター

○白木佳代子, 宍戸 淑子, 平林 和子

同 相澤病院乳腺外科

橋都 透子, 唐木 芳昭

【はじめに】当センター乳房超音波（以下MUS）検診の要精検率は高く、その原因の一つとして医師・技師間にMUS所見に対する解釈の差があるのではないかと考えた。改善策として技師によるMUSカテゴリー（以下C）分類を導入した。【対象】C分類を導入した2012年1月から12月までにMUS検診を受診した3,132名（21~84歳、平均年齢47.3歳）。【方法】判定結果における医師・技師の差について検討し、導入前後の要精検率を分析した。【結果】医師判定によるC2以上は3,132名中1,750名であり、うち1,510名（86.3%）が技師によるC分類と一致していた。要精検とするか否かであるC2とC3での不一致が229名と多かった。また、要精検率は11.21%であり、導入前と比較してさらに高い結果となった。【考察・結語】不一致が多かったC2とC3については、評価方法についての検討と、医師・技師間の意思疎通を深めることが必要であると考えられた。今回の結果からは要精検率の低下には繋がらなかったが、導入後の観察期間が短いため今後の経過を追いたい。

5 長野県健康づくり事業団における乳房検診の現状と報告（US編）

公益財団法人長野県健康づくり事業団

○田尻 聡子, 唐木 厚子, 米山 淳子

善哉のぶ子

増田医院

増田 裕行

【はじめに】当事業団の乳房検診は視触診と必要に応じ超音波検査をする体制で行っていた。医師派遣が困難な地域が増えてきたため、視触診を行わず超音波検査のみの検診を工夫しているが、現在の超音波に関わる検診について報告する。【背景】昭和56年より医師の視触診に必要に応じ超音波検査を併用した検診を開始（視触診+一部超音波）。平成19年より受診者全員に視触診と超音波検査を行う検診（視触診+超音波）と視触診を行わず超音波検査のみを行う検診（超音波単独）を実施。平成23年より超音波単独検診が増加。【超音波単独検診対象者】比較的若い受診者【読影体制】後日読影、乳房超音波講習会に参加したA・B判定の医師による静止画像フィルムによるシングル読影【まとめ】現在、超音波単独検診が全体の7割ほどになってきた。超音波単独検診において、40、50歳代のがん発見率は比較的良い結果であった。乳房検診における超音波検査の有効性は現在実証されておらず乳癌診療ガイドラインでもC判定であるが、J-STARTの結果に注目し、これからの乳房検診の方法を検討していきたい。

6 乳房検診におけるPET（Positron Emission Tomography）検診の役割

慈泉会相澤病院外科

○橋都 透子, 唐木 芳昭

相澤健康センター健康管理部

白木佳代子, 宍戸 淑子, 平林 和子

PETがん検診の有効性に関するエビデンスは不十分であるが、PETがん検診の受診者は増加傾向にある。当施設では2003年4月よりPETがん検診を導入しており、PET検査の果たす役割について検討を行った。対象は2009年1月から2012年12月までの乳房検診（MMGまたはUSによる検診）を受けた女性26,538人、同時期のPETがん検診を受けた女性1,260人。乳房検診群、PET検診群の精度は、要精査率は各々10.32% 13.02%、乳癌発見率は0.29%（77人）0.71%（9人）、陽性反応的中度は2.81% 5.49%であった。PET検診による発見乳癌9例の平均年齢は60.9歳、早期乳癌率は88.9%で、年代別乳がん発見率は50代では0.69%、60代では1.25%。当院のPET検診による乳癌発見率は高い水準を目指し、PETがん検診の有効性を示唆する結果であった。

7 スクリーニングマンモグラフィモニター 診断導入時の工夫と問題点について

昭和伊南総合病院外科

○森川 明男, 北原 弘恵, 奥村 征大
吉村 昌記, 唐澤 幸彦, 織井 崇

ソフトコピー診断は徐々に普及しつつある。当院も2013年2月よりソフトコピー診断に移行した。〈検診用報告書作成〉当院はマンモビューアはPSP社を採用。検診報告書について同社既存読影ソフト iReporter を用いて作成した。検索が容易で、2重読影システムを組み込み、マウス操作のみで簡便に使用できるようにした。満足できるものとなった。〈ハードコピー診断とソフトコピー診断の比較〉(対象) 当院ドック検診症例。ハードは2012年4-9月829例, ソフトは2012年4-9月968例。ソフトは過去比較あり(結果) 要精検率はハード7.9%, ソフト6.0%でややソフトで減少。所見別ではハードでは石灰化2.5%, 腫瘍2.0%, その他3.7%。ソフトは0.4%, 1.9%, 3.7%。ソフトで石灰化の検出率が減少した。(考察) 石灰化検出率の減少は過去画像の比較読影の影響が大きいと思われるが、注意して読影が必要。精度管理のため自施設の要精検率, 精検所見の継続的評価。2次検診結果, がん検出率の把握が必要と思われた。

8 検診後二次精査症例の現況と対応

佐久総合病院乳腺外科

○半田喜美也, 石毛 広雪

同 地域ケア科

荻原 菜緒

2009年1月~2012年12月までの間に当院外科外来へ受診となった乳癌症例は全588例あり, 対策型検診後(自治体検診) 103例(18%), 任意型検診後(健診・ドック) 63例(11%), 他疾患 follow up 中の発見例 83例(14%), 有症状での受診は339例(58%)であった。対策型・任意型の両者で約30%が一次検診後の精検症例で占められている。年齢分布は対策型41~85歳(中央値:60歳), 任意型37~90歳(中央値:55歳)で, 年間約30例は検診発見乳癌となった。精検時は無症状がほとんどであるが, 有症状や Stage IV のケースも含まれていた。検診発見乳癌における乳房温存率は約80%で, 有症状で受診されたケースと比較して高い乳房温存率であった。DCIS での発見は対策型, 任意型共に約10%程度で, ほとんどが浸潤癌になってからの発見であった。病理学的検索では原則

CNB あるいはマンモトーム生検にて確定診断を行っている。精検時USでは早くからカテゴリー分類を行い, 不要な生検を行わないよう努めている。精検後 follow up では背景乳腺の病理学的変化を参考に患者説明や follow に活かし, 必要な経過観察が途切れないうち留意している。本邦における検診受診率が欧米に比し低いことは指摘されて久しい。未だ局所進行の状態で来院となるケースを経験する。検診・精検受診率を改善すべく諸対策が今後も望まれる。

9 長野県におけるセンチネルリンパ節生検(SNB)の現状と展望

… 県内アンケート調査結果及び第15回 SNNS (Sentinel Node Navigation Surgery) 研究会シンポジウムの報告を兼ねて…

松本市立病院外科

○高木 洋行, 武田 美鈴, 坂本 広登
三澤 俊一, 桐井 靖

今年9月に行われた SNNS 研究会シンポジウムで発表するに当たり, 県内の医療機関にアンケートをお願いしご回答いただいた。その結果を踏まえシンポジウムで討議された現状と展望を報告する。長野県内, 34病院 SNB に関わるアンケートを依頼。26病院(76.5%)から返答。SNB を施行している22病院は, 年間症例数10以下の4病院100症例以上の3病院と様々である。SN 検出方法は RI 法+色素法 1病院, RI 法+色素法+ICG 蛍光法 2病院, 色素法+ICG 蛍光法15病院, ICG 蛍光法単独 1病院, 色素法単独 2病院である。RI 法を行っている施設は3病院にとどまり, ICG 蛍光法を取り入れている病院が18病院82%に及ぶ。ICG 蛍光法が長野県の SNB を支えていると小括した。次いで, ACOSOGZ0011を review し, SNB のこれから特に non-sentinel node の扱いについてシンポジウムで討議したので報告した。

10 信州大学でのリンパ管細静脈吻合術(LVA)によるリンパ浮腫治療の実際

信州大学医学部形成再建外科学講座

○安永 能周, 松尾 清

【背景】乳癌術後の10%が上肢リンパ浮腫を発症すると言われている。一旦, 発症すると自然軽快することはない, 生涯にわたり進行し続ける。信州大学形成外科では2012年10月に専門外来を開設し, 積極的に外科的治療(LVA)を行っている。

【症例】57歳女性。スーパー店員。右乳癌にて術前化療後、Bt+Ax。50Gyの術後照射。術前化療中に浮腫を自覚し、術後6カ月で形成外科へ紹介。右上肢にISL 2期（後期）のリンパ浮腫を認めた。LVAを2回施行した。

【結果】患肢の周径が減少し、小銭を落とさないようになった。患肢の細胞外液量が860 mLから690 mLへ20%減少した。

【考察】乳癌術後で上肢にだるさなどの自覚症状や周径差があれば、LVAの適応となる。リンパ管に不可逆的な変性を生じる前の方が効果が高いため、ISL 1期（挙上により浮腫が軽減。圧痕を生じる）の間にLVAを行えるよう、啓蒙活動が必要である。

11 当院における検診を契機に発見された乳癌症例の検討

松本市立病院外科

○武田 美鈴, 高木 洋行, 坂本 広登
三澤 俊一, 桐井 靖

【目的】検診を契機に発見された乳癌症例の特性を調べる。【対象と方法】2005年1月から2013年7月までの当院における乳癌手術症例233例から、術前化学療法と男性症例を除いた228例のうち、受診契機が明らかであり比較項目を満たしている207例において、検診群、自覚症状群に分け、発見契機、年齢、病理組織学的特性などを比較検討した。解析は χ^2 検定を用いた。【結果】検診群60人（平均54.8歳）、自覚症状群147人（平均60.9歳）であり、検診群の方が若年の傾向があった。検診群の方が自覚症状群よりもDCISの割合が有意に高かった（ $p < 0.01$ ）。自覚症状群は脈管侵襲、リンパ節転移の割合が有意に高く（ $p < 0.01$ ）、乳房切除術を受ける割合も有意に高かった（ $p < 0.01$ ）。ER陽性、HER2陽性や核Gradeについては両者に差はなかった。【結語】検診は早期発見に有用であると思われた。

12 当科乳癌手術症例の発見契機の検討

信州大学医学部附属病院乳腺内分泌外科

○小野 真由, 大場 崇旦, 家里明日美
花村 徹, 岡田 敏宏, 渡邊 隆之
金井 敏晴, 前野 一真, 望月 靖弘
伊藤 研一
同 外科学第2
天野 純

当院で手術を施行した乳癌症例を発見契機別に分類し、特徴を解析した。

【対象と方法】2009年4月から2011年9月に当科で手術を施行した原発性乳癌270例。検診群91例と自覚群149例の術式や臨床病理学的因子を解析した。

【結果】US平均腫瘤径は検診群で有意に小さかった。術式は、検診群で乳房部分切除が有意に多く、腋窩郭清は自覚群で有意に多かった。病理学的因子では、非浸潤癌は検診群で有意に高く、腋窩リンパ節転移は自覚群で有意に多かった。ER/PgR陽性乳癌の割合は検診群で有意に高く、一方HER2陽性例や組織学的悪性度は自覚群で有意に高かった。

【考察】検診発見乳癌は自己発見乳癌に比べ早期癌が多く、非侵襲的な手術が施行されていたことは検診普及推進の根拠となる。

13 当院ドック検診におけるマンモグラフィー陰性乳癌

長野市民病院呼吸器・乳腺外科

○小沢 恵介, 小林 宣隆, 有村 隆明
西村 秀紀

【はじめに】当院人間ドックでの乳癌検診は、原則として視触診とMMGで行っているが、視触診で要精査となるもMMGで所見がない症例を経験したので検討した。

【対象】2003年9月から2013年11月までに延べ13,312名のMMG読影でカテゴリー分類を行い、視触診による要精査も含めて精査した結果、乳癌の診断が得られた症例は29例であった。このうちカテゴリー2以下であるMMG陰性乳癌の8症例を対象とした。

【結果】年齢は39～71歳（平均52.4歳）で全例女性、乳癌家族歴を2例に認めた。初受診で発見された症例が5例、受診歴のある症例が3例であった。MMG陰性の内訳は、撮影範囲外の腫瘤が1例、所見なしが7例のうち2例は高濃度乳腺であった。全例腫瘤触知として精査となったが、1例は対側に発見された症例であった。

【まとめ】当院ドック検診により発見された乳癌症例は29例であったが、そのうち8例（27.6%）がMMG陰性乳癌であった。視触診単独による検診は勧められないが、重要な検診方法である。

14 乳房再建について再建の話題と、信州大学での1次再建の方針

信州大学医学部形成再建外科学講座

○安永 能周, 松尾 清

7月のシリコン・インプラント保険承認はメディアでも大きく取り上げられ、2013年は日本の乳房再建にとって歴史的な1年となった。アナトミカル型組織拡張器 (TE) とシリコン・インプラントを保険治療で使用するためには、乳腺外科と形成外科両方の専門医が日本乳房オンコプラスチックサージャリー学会に入会し、講習会を受講して責任医師登録を行った上、施設認定を受ける必要がある。2013年11月時点では乳腺外科が単独でアナトミカル TE, インプラントを保険で挿入することは認められていない。信州大学形成外科ではインプラント, DIEP 皮弁 (腹部の遊離皮弁), 広背筋皮弁の3つの術式で保険による乳房再建を行っている。皮弁による1次再建はSSMもしくはNSM症例に限定して行い、限られた手術枠の中で、患者の希望と癌治療を両立させる配慮を行っている。

15 報告のあった中間期乳癌の症例検討

増田医院

○増田 裕行

MMG 検診に関し、健康づくり事業団に報告のあった中間期乳癌の9例につき症例を提示した (3例が真の中間期乳癌の扱いになると思われる)。中間期乳癌を減らすコツは、① 過去画像との比較, ② 左右乳房の撮影条件の差を加味した読影方法, ③ blind area を意識した読影方法, などにあると思われる。今後増えてくるデジタル MMG の特徴を活かした読影方法が望まれる。

中間期乳癌の把握は重要なので、かかる症例があった場合は必ず報告をお願いしたい。今後は本懇話会で症例を提示して情報を共有するとともに、読影医個人宛にデジタル画像をお送りし、feed back を図って行きたいと考えている。

特別講演

「本邦の乳がん検診の現状」

福井県済生会病院外科部長

笠原 善郎